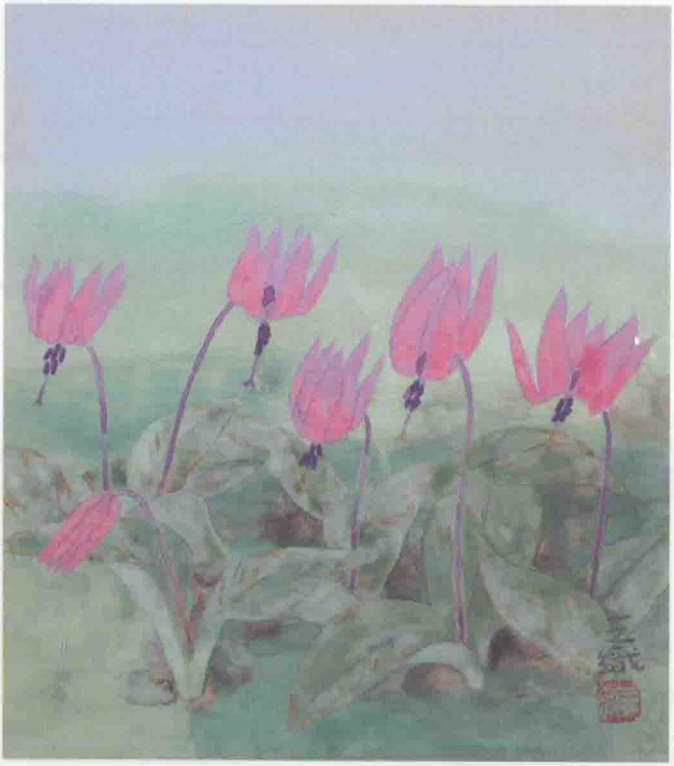
弱者情景

伊藤香世子歌集



鮒叢書第八九篇

弱者情景

伊藤香世子歌集

現代短歌社

歌集 弱者憧憬　　鮒叢書第89篇

平成26年11月７日　発行

著　者　伊藤香世子
〒370-0033 さいたま市見沼区御蔵1428-5
発行人　道具武志
印　刷　㈱キャップス
発行所　現代短歌社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-35-26
振替口座　00160-5-290969
電　話　03（5804）7100

定価2500円（本体2315円＋税）
ISBN978-4-86534-057-0 C0092 ¥2315E

目次

序 ―若鮎の魅力― 島崎榮一
来週 一七
若菜 一九
不安 二三
炎天 二四
駅前 二八
電車 三一
定年 三四
新緑 三八
立葵 四一
英語 四三

電 写 荒 早 春 海 助 南 鈴 感 工 春 抜 寝 雷
池 真 川 道 雷 馬 言 部 虫 動 事 菜 歯 具 雲

九三 八九 八五 八一 七七 七四 七一 六八 六六 六三 六〇 五七 五四 五〇 四六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

身長 一四四
和服 一四二
目薬 一三八
笑顔 一三四
数値 一三〇
職場 一二七
人形 一二四
人波 一二〇
携帯 一一七
万緑 一一四
地震 一一〇
節分 一〇七
再生 一〇四
流行 一〇一
気配 九七

溜息　一四七
欲望　一五〇
雨風　一五四
鼻歌　一五八
上空　一六一
あとがき　一六五

序

―若鮎の魅力―

島崎榮一

伊藤香世子さんが『弱者憧憬』を出すことになった。集名には著者の現在が現れる。弱い者に近づきその弱さをみずからの内に取り込みたいとする考えは一般の通念では図りがたい。困難に打ち勝つため強い気持ちで生きたいと思うのが自然であろう。文学的な理念から無縁の言葉を選んだとも思えない。ここから何が出てくるか。さきに『白鷺』があるから二冊目の歌集である。

若枝に蕾ほぐるる木蓮の春日まとひて空に抜き出づ

白木蓮そこに咲くから見にゆけり見沼の里の低き山の上

最初に木蓮のつぼみの歌がある。「蕾ほぐるる」「空に抜き出づ」ともに伸びやかでこころよい。「若枝に」「春日まとひて」もよく機能して、若さのかがやきとも言うべき健康な空気を伝えている。「そこに咲くから見にゆけり」は不思議な言葉である。短歌が好きで若いときから歌って来た、と人から聞くことがある。作歌は格闘技とは別のものだが一首二首と数えるほどだから昔から命懸けでやってきたのだ。一方、アルピニストは山登りが好きだとは言わない。

山に登るのは山がそこにあるからだ、と哲学的な言い訳をする。「そこに咲くから見にゆけり」ここに潜む冷めた目の働きは何だろう。共感も感動もなく、一首目の感受とは随分ちがうようだ。

早川の清流に鮎泳げると目を凝らし見る橋の上より

山並は濃紺となり夕日いま浅間を照らし沈みつつあり

渓水に泳ぐ鮎の歌。橋の上に立つ作者の姿もはっきりと見える。若鮎か群れているのか、細かい点はふれない。自在に泳ぐ生命の力。むだが無く単純簡明で変な褒め方だが浅詠みの魅力ともいえる。次は入日を惜しむ歌である。大きな風景を歌って力負けしないのは努力して表現の力を身に付けたのだ。

数日を廂にをりしかまきりの羽の草色蜘蛛食ひ尽くす

少しでも人の前ゆく優越感さつさうと乗る動く歩道に

不用意に飛んだ蟷螂が蜘蛛の巣に掛かってしまった。朝に見て午後ふたたび見たのかも知れない。自然の摂理だが無惨といえば無惨でもある。木蓮の白花

や鮎を歌うだけでなくこうした非情なひとこまも見逃さない。人の前に立って動く歩道をゆく。ここには弱者憧憬などという逆説的な空気はなくきわめて健康である。

節分の宵のならひは柊に鰯の頭くくり付けたり

私の村ではひいらぎとは別に串にいわしの頭を差してこれを火にあぶる。火にあぶりながら、米の虫もじりじり、菜っ葉の虫もじりじりとやたらに繰り返す。つまり虫退治、虫追いのまじないである。

烏羽玉の闇に寝息のもれくるを虎と気づかず朝目覚めたり

かたわらに寝息を立てているのが虎だというのは穏やかでない。まして酒に酔って寝た夫の姿でもない。作者の部屋にはいつも猫がいるらしい。猫の歌は選歌の段階で削ったはずだがこうして残った歌もあったようだ。猫や孫など愛情を向けやすいものは作歌の対象にしない方がいい。情が移る。はじめから可愛いと答えの出ているものは歌う必要がないのである。その意味では友もよく

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ない。友は親愛でかけがえのない存在だが定型のなかには入らない。敵にも味方にもなれない駄目な人間を友というのである。猫に関連して余計なことを書いた。

着信のおとのみ発し携帯の電池消えたり充電せねば

通勤の改札口に五百円拾ひて今日のいさみとなりぬ

仕事関連の二首。ここでは充電に注目した。人間自分そのものを歌っているように思ったからだ。携帯ではなく自らの充電願望。寿司でも食べて一杯のんで元気になろう。男の考えだがこれに近い心境を思ったことである。二首目は五百円硬貨をひろって励みになったという。作意の見える物語的な小心。さもしいと言えばさもしい。この人間臭さ。男でも書けない一面といえよう。

一秒も違ふことなき電波時計記念の品の置き場に迷ふ

居間に置く電波時計の秒針の赤きがせかす朝の出勤

この歌の前には「澄み渡る空にも増して晴れ晴れし定年の夫を握手で迎ふ」

夫の帰宅をよろこぶ歌があって、退職記念の時計であることが解る。「一秒も違ふことなき」几帳面な性格が伺えご主人退職の後も朝々の出勤にいそぐ。わが国の主婦特有の甲斐甲斐しい前向きな一面があるようだ。

四世代住めるむすめの嫁ぎ先沢庵漬けは男の仕事とふ

一口に師走といふも憚れり義妹持ち来る倒産の報

苦労が多いから長男の嫁にはいかない。いまどきの若い女性にありがちな傾向だが、このお嬢さんは確りしている。両親がいるだけでなく長寿の家系でその上の人たちがいる。勿論自分のお子たちもいる。初句の「四世代住める」がそれである。つづく言葉が沢庵漬だ。十二月の寒いころ樽に漬けるのである。漬け終わると樽の重さは計り知れない。これを納屋に運ぶのは当然男の仕事である。この作業がおわると強い北風が吹いて歳晩になるのだが、健康な明るい話題ばかりではなかったようだ。

金春の師の家見えてなつかしき翁の面の掛かる稽古場

携帯で知り得し言葉かなとこ雲かなしきといふ古き言葉も

著者の伊藤香世子さんは金春流の能を修行したみやびな人である。たまたま街をゆくときかつての師匠の家が見えた。そこで「翁の面の掛かる稽古場」を思ったのである。今は短歌一筋だが、お若いころはかなり熱心に稽古場に通ったらしい。中興の祖金春禅竹は世阿彌の娘むこである。流謫の生活を余儀なくされた世阿彌は佐渡から禅竹あてに書簡を送っている。それは生駒山宝山寺に大切に保管されているとのことだが、私はくわしいことは知らないのである。

二首目の携帯ははじめ電話だったが、いまは写真を撮るばかりではなく辞書の役割をも果たす。偶然「かなとこ雲」に出会った。秋の夕暮れ西の方ひくめの空に重くしっかりした雲の沈むのを見る。鉄床雲がこれである。人によっては「かなしき」という。ここには言葉を鍛える意味もあって漢字で「鎺」と書く。白秋の添削実例に同題の単行本があるが作者は知っていた節がある。

紙漉きの実習見つつ楽しげな説明聞けばわれも漉きたし

尋ねしは仙覚律師の顕彰碑万葉仮名の時代なつかし

埼玉県西部にある和紙の里小川の町を尋ねての作である。このときは私も同行している。和紙は寒中に漉くのが理想といわれている。道沿いの農家の庭に臘梅が咲いているのを覚えているから寒い日の行楽だったはずである。帰路、足をのばして仙覚律師の顕彰碑を拝した。碑は四メートルを越える大きなもので杉森の茂る小高い丘の上にあった。仙覚律師は建仁三年生まれ、万葉集に訓をつけた人として知られる。案内は詩人の大谷佳子氏であった。二首目は時間と空間をこえて万葉仮名の古き時代を味わっている。

なでしこの人気根強き浴衣をとさがす乙女子その足長し

浴衣から衣装替へして人形の顔の幼き微笑み湛ふ

ぴくぴくとまぶた動くが煩はし決算近く老眼進みし

車中にて化粧をなせる少女らの白きその指みな器用なり

著者は埼玉県北部の町、熊谷の某百貨店の和服売り場に勤めをもつ。最近、

若い人の紺の浴衣になでしこの柄が人気だという。女子サッカーの影響で「なでしこ現象」ともいうべき波のうねりが起きたのだ。若い客の一人がしきりに柄を探している。「その足長し」作者は羨むような目を向けている。二首目の人形はマネキンの意。週明けの秋づいた日に衣替えをしたのであろう。無機物の人形に生命の微笑みを与えている。九月の決算が近づいて珍しく作者の表情も緊張ぎみだ。結句の「老眼進みし」は無造作に投げ出すように歌っている。四首目の「車中にて化粧」よく見かけることで今は珍しくなくなった。大人の視線はともすると批判的になりがちだが「白きその指みな器用なり」全く悪意がない。仕事あるいは通勤の歌だがどれもさらさらとした質で歌っている。これは著者の性情ともかかわるもので、集の全体に目立たない色艶で静かに流れている。

逃げ難きアウシュビッツを彷彿す駅出でミスト浴む朝の道

巻末の歌のアウシュビッツはポーランド南部の都市、オシブィンチムのドイ

ツ語名。昔ドイツ占領下に強制収容所がありユダヤ人などが多数虐殺された。初句の「逃げ難き」はそれを踏まえている。熊谷は我が国で最も暑い町の一つだから、アーケードの入り口に噴射口をもうけ、冷たい霧を噴霧する。夏の日、有り難い設備のはずだが捕虜虐殺の歴史と結び付けたところに力量がある。さらに広い視野でものを見、持ち前の努力を重ね、今後歌いつづける中で大輪の開花をみせてほしい。

本集の表紙は日本美術院の同人、菊川三織子先生の「かたくりの花」で飾ることが出来た。前集のときは何も出来なかった。寸暇を惜しんでの精進を願うものである。期待と翼蔽の思いで序を記した。

平成二十六年七月吉日

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com